

# 公益財団法人 日本骨髄バンク 第 57 回 業務執行会議 議事録

日 時： 平成 30 年 12 月 10 日（月） 18：00～19：30  
場 所： 廣瀬第 2 ビル 地下会議室  
出 席： 小寺 良尚（理事長）、加藤 俊一（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）、  
浅野 史郎（理事）、金森 平和（同）、鈴木 利治（同）、高梨 美乃子（同）、  
橋本 明子（同）、小野 高史（監事）  
欠 席： 高橋 聡（理事）、谷口 修一（同）、佐藤 太亮（監事）  
陪 席： 幕内 陽介（厚生労働省 健康局難病対策課移植医療対策推進室 室長補佐）  
傍 聴 者： 2 名  
事 務 局： 松蘭 正人（事務局長）、五月女 忠雄（総務部長）、大久保 英彦（広報渉外部長）  
小瀧 美加（移植調整部長 兼 新規事業部長）、折原 勝己（ドナコデイナー部長）、  
渡邊 善久（総務部 参事）、小島 勝（広報渉外部 TL）、吉川 亜子（ドナコデイナー部  
指導研修 TL）、関 由夏（関東地区事務局地区代表）、廣瀬 舞（広報渉外部）  
原田 彩加（広報渉外部）、上原 淳（総務部）

（順不同、敬称略）

## 1. 開会

開会にあたり小寺理事長が挨拶した。

## 2. 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第 6 条により本業務執行会議が成立した。

## 3. 議長選出

業務執行会議運営規則第 5 条により業務執行会議の議長は理事長が当たることとされており、小寺理事長が議長に選出された。

## 4. 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は業務執行会議運営規則第 8 条により議長及び出席した副理事長がこれに記名、押印しなければならないとされており、小寺理事長、加藤副理事長、佐藤副理事長がこれに当たるとされた。

## 5. 議事録確認

前回の議事録案を全会一致で了承した。

〔議 事〕

## 6. 報告事項（敬称略）

### (1) 若年者のリクルート akiba:F 献血ルームでのトライアルについて

大久保広報渉外部長が資料に基づき説明した。

東京の秋葉原にある akiba:F 献血ルームでのトライアルについて報告する。実施の主旨であ

る。若年者のドナー登録推進策として10代から30代の若年者が多く訪れる献血ルームを対象に、ドナー登録説明員を配置し、集中して若年者のドナー登録確保を行うことを検討している。その前提として若年者が訪れる10都道府県、北海道から広島県の赤十字センターのヒアリングを行なった。来年4月から配置するためのオペレーションについて10月から11月にかけて1か月間トライアルをakiba:F献血ルームで実施した。akiba:F献血ルームはバンクの事務局に近く、緊急時の対応が容易であることと、ルーム長が骨髄バンクに理解があり協力的であることからこの献血ルームでトライアルを実施した。実施期間は10月3日から11月2日の4週間、①と②は土日が入っているそれぞれ午前からと午後からのスケジュールである。③と④は平日で午前からと午後からで、合計で20日間である。こういったことを検証したかったかと言うと、献血来場者数とドナー登録者の比較だとか、曜日・時間帯別・年代別のドナー登録人数、説明員配置の際の問題点の把握、他の献血ルームに配置する場合の目安、説明員配置の際のルームとの確認・調整事項をトライアルで検証した。次の頁、実施の際のルールであるが、バンクスタッフは日赤の職員と区別がつくようにたすき又はスタッフジャンパーを着用した。受付場所は献血者着席スペース、説明時間は概ね5分程度とした。じっくり説明すると15分くらいかかるがそれをコンパクトにまとめたマニュアルを作成して5分で説明できるようにした。成分献血は時間がかかるので全血の献血者に声掛けして欲しいとakiba:F献血ルームからのリクエストで声掛けの条件は、全献血者にした。献血後の登録は行わずチャンス配布して次回お越しいただいたときにと簡単に説明を行った。受付方法である。総合窓口で献血カードを回収して、血圧計測をする。血圧計測をして受付する間に声掛けのタイミングがある。受付後に待合室で問診を待っている間にも「今日は骨髄バンクの登録ができますがいかがでしょうか。お時間があれば説明いたします。」と声掛けをしている。採血後に献血カードを返却する間にチャンス配布して次回以降の案内をした。スタッフはバンクの若手職員およびスノーバンクボランティア、これはNPO法人で若い方が骨髄バンクを支援するボランティア団体を立ち上げていて、その方たちに入っていた。1日1名を中心に行ったが、多い時には3名で行った。次の頁、結果である。20日間で合計176名、男性が141名、女性が35名であった。秋葉原の特性として男性が非常に多かった。1日平均約9名、献血希望者に対する割合は約7%であった。次の頁、日別登録状況である。ピンクの棒グラフが献血者の来場者数、ブルーの下にあるのがドナー登録者の実数になる。次の頁、曜日別および1日当たり登録人数である。曜日では月曜、木曜、金曜、土曜日、日曜日の登録人数が多かった。1日当たりでは平均すると日曜日が一番多くて22.5人いた。土曜日は10.5人、月曜日も12.5人いた。次の頁、時間帯別である。午前中は1割、午後が9割である。午前中の来場者はやはり少ないことと、献血の予約をされている方が多いので、どうしても午後に声をかけて登録される方が多かった。男女別は先ほど申し上げたように男性8割、女性2割であった。次の頁、年代別である。10代20代30代で約8割の方が登録された。これは意図的に若い方を中心に声をかけていたからである。採血種別別である。全血が65%、成分献血が約20%、献血の採血ができなかったけれどもドナー登録していただいた方が20人いた。次の頁、献血来場者数ということで、全血で来られた人の数は水木金土日の来場者が多く、月曜日と火曜日は少ない。右側に1日当たりの円グラフがあるが、平日と比較すると土日は倍の来場者があった。次の頁、細かい数字になるが、左側のブルーのところは骨髄登録者数の日別の内訳である。右側の献血受付実績は200ml、400mlの全血、成分献血の方が何人来られたかの内訳である。総括である。実施結果について骨髄ドナー登録者数は、著しく増えた。これまで献血ルームで説明員の配置をしていなかったが、配置したことにより4週間で176名、昨年度は年間で139名であるからそれを20日間で上回った。それから多数の若年者層ドナー登録を確保することができた。10代から30代が

80%であった。土日月曜日にドナー登録者が多かった。献血ドナーが多い日は待ち時間があるため、この時間を利用して説明をしたらどうかと献血ルーム長の理解をいただいてその時間に登録説明を行った。ただヒアリングしている中では献血ルームによって土日は献血を優先したいので平日にしてほしいという場合もある。総括②である。平日午前中のドナー登録者は少ない。約1割である。赤十字スタッフが困惑するような事態やトラブルは発生しなかった。献血の流れを止めるなど、献血業務への影響は少なかった。説明は、献血ドナーの待機スペース、かなり広い読書スペースや待合スペース等がありそこで実施した。当初はボランティアルームと言っているいろいろなイベントをしているガラス張りの部屋でも良いと話があったが、そこに入ってしまうと全体を見渡せなくて、次にどの方に声を掛けようかという時に見えないので待合スペースで行った。総括③である。他地区に展開する際のマニュアルを作成している。今後、説明員を配置するルームの選定と、配置の曜日・時間帯の設定を検討して準備して参りたい。一番下、若手説明員の採用・教育・熟練度ということで、若いドナーを確保するには若い説明員が必要で、新規の臨時職員採用等を考えて対応していきたい。最後になるが、やはり献血ルーム長の理解が非常に大切である。赤十字スタッフからの案内、例えば献血受付で「今日骨髄バンクのスタッフが来ますが時間があればどうですか。」と声掛けがあると、効果がより一層上がった。バンクのスタッフについても献血ルームの混雑状況など見ながら献血が滞らないようスムーズに目配りしながら進めることができた。4月からは他のルームで展開していくにあたってマニュアルを整備して進めていきたい。

#### (主な意見)

- <加藤> これまでの秋葉原の月間登録数と比較してどれくらい増えたのか。
- <大久保> 13頁総括①に記載したが、昨年度は10月単月で12名である。今回は4週間で176名であった。
- <加藤> 10倍以上一気に増えたということか。それから、説明をしてそれに応諾された方は何パーセントくらいになるのか。おおよその数で、半分くらいの方が登録してくれたのか、それより多かったのか少なかったのか。
- <原田> 説明して登録されなかった方もいたが、個人的な感覚では8割以上の方は説明を聞いて登録してくださった。
- <加藤> 大切な数字なので、これから記録を残していただけるとよい。それから、その人たちの献血回数の相関というのが次に必要になってくる。応諾する人は献血回数の多い人なのか、それとも献血回数はあまり関係ないのか。今後どこに重点を置くかの参考になる。また、秋葉原はなぜ男性の献血者が多いのか。
- <大久保> オタクの方が多い。フィギュアやコミックであるとか、献血ルーム自体にも若い男性が集まる仕掛けがされている。
- <加藤> こんなに男性が多いとは思わなかった。これは固有の問題か。通常バンクの登録は若い人たちについては若干女性の方が多い。
- <橋本> 以前にドイツかどこかの国から、献血はドナーのモチベーションを維持するのに有効な行為だ、という報告があったと記憶している。それと相通じることなのかなと思った。つばさのニューズレターに掲載された2回提供した彼は長年の献血オタクで、同時にIT関連の仕事に就いて、共通するものがあると思う。10頁7の採血種別別というのはこの日来た人数か。
- <大久保> これはドナー登録してくださった方の採血種別別である。

- <浅野> 説明を聞いた人の8割くらいが登録されたということだが、読書していたり音楽を聴いたりしている人に、それを遮って説明させてくださいと声をかけたわけである。声をかけた人の何割くらいが説明を聞いてくれたのか。半分より多いのか。
- <原田> 半分よりかは確実に多い。8割くらいの方は声掛けすると「じゃあ」と言って聞いてくださった。
- <浅野> そもそも献血に来る人はそういう人が多いのか。
- <原田> 待ち時間のある人に限って声掛けをしたので「待っている時間なら」と聞いてくださる方が多かった。
- <高梨> 結局どこに行くかによって若年者が増えるのかが決まる。ドラスティックに若年者に行ったわけではなく場所を選んで行ったわけである。
- <小寺> 10頁、最初に成分献血の人には遠慮して声をかけないと言ったが、その割には成分献血が全体の19%を占めるのは大きくないか。
- <大久保> おそらく土日で成分献血の人は待ち時間があつたのではないかと思う。
- <小寺> 成分献血であるとより積極的な人が多いのかなと思った。
- <橋本> そこは慎重に考えた方がよい。成分献血に応じるモチベーションを持っているというのは解析する価値があるかなと思う。
- <小寺> これは1回ではないであろうから、他のところのデータと合わせるとある程度出てくるのではないか。心配なのは、スタッフ数は1日に1~3人で土日にも行ったが、これは今までにもあつたのか。
- <大久保> これまで献血ルームでやったのは30件くらいあるが、頻度が週に1日とか2日であった。今回は集中してやった。今後はこの形で続けていきたいと考えている。
- <小寺> 土日を働かせるということである。
- <大久保> そういう労働条件で採用している。
- <小寺> そういうところは今のご時勢なので考えてやらないといけない。

## (2) NMD P大会参加報告

広報渉外部廣瀬が資料に基づき説明した。

NMD P年次総会およびNMD P担当者との打ち合わせに参加したので、主な内容を簡単に報告する。日時場所は書いてある通りである。JMD P国際委員会委員長の岡本先生と参加した。今回はNMD Pの方に特別に時間をいただき広報活動について情報交換をした。初めに年次総会の報告をする。NMD Pの基本戦略と目標である。NMD Pでは、すべての患者にとって平等な結果をもたらすことを最も重要なゴールとして考えている。3ヶ年目標として、ドナー適格性判定を迅速に実施し、移植施設の希望する移植日を少なくとも80%達成することを掲げている。NMD Pでは、2018年夏期より迅速コーディネートFast Trackを開始した。導入にあたっては、複数の移植施設において約1年間のトライアルを行った。概要は以下の①から⑤の通りである。移植施設は選択した10名のドナーに順位付けしNMD Pへ送付する。順位付けすることにより、移植施設に確認する手間を省いた点と、HLA検査を従来2~3週間かけていたところをNMD PのHLA検査機関へ送ることによって3日間に抑えたことが大きかった。次に血縁間移植サービスである。遠隔地にいる血縁ドナーに対して、NM

DPが仲介し、術前健診・適格性判定・採取・運搬を行うサービスを実施している。国内外を含めてこれまでの実績は約240件である。ドナー側の移動の負担、金銭面・スケジュール面等が軽減されることからニーズがある。本サービスに関しては、JM DPとも提携を開始している。現在のところ実績はないが、今後はUS患者 - JM DPドナーにおいても、発生が予想される。広報活動におけるNMD P担当者との打ち合わせについて報告する。(1) NMD Pにおけるドナー登録の方法について。NMD Pでは採血検査での登録受付は一切行っておらず、スワブ検査でのみ登録を受け付けている。スワブ検査導入後、若年者の登録数は確実に増加している。従来はオンライン登録とあわせてLive Driveと呼ばれる登録会でのスワブ検査・個人情報記入でも登録を受け付けていたが、2018年7月よりオンライン登録のみに受付を限定した。登録受付方法の変更により、今期は大幅な登録数アップを見込んでいる。現在、Live Driveでは説明とオンライン登録への誘導のみ行っている。その場での安易な登録を防いでいる。より提供意思が強い、つまり応諾率が高いドナーを集めることを目的としている。従来の方では、オンライン登録者の応諾率はLive Drive登録者に比べて2割ほど高いという結果があった。3頁目、オンライン登録の手順である。登録希望者は、QRコードを読み取るかSMSで指定のワードをNMD Pへ送信する。自動表示されるURLにアクセスし、メールアドレス・名前・パスワードを入力する。メールで届く登録用URLにアクセスし、上記以外の詳細な個人情報を入力する。住所や電話番号等の連絡先および健康状態や人種等の個人情報の他に、「どこでNMD Pを知ったか?」「なぜ登録しようと思ったか?」等の動機、本人と連絡がつかなかった場合の連絡先として家族や友人などの情報も集めている。入力した住所に届くスワブキットで自身の口腔粘膜を採取し、NMD Pへ返送する。登録者は登録完了のメール、手紙とドナーカードを受領して登録は完了する。スワブキットの返送が無い場合は催促メールを送信する。90日後までに返送が無い場合は追跡を中止する。Web登録者のスワブ返送率は約70%と比較的高い数字になっているが、逆に30%の返送しない提供意思の弱い人を省くのがポイントであると担当者は話していた。続けてリテンションについてである。メールやSMS、SNS、さまざまなコミュニケーションツールを活用して定期的にメッセージを送信している。メッセージの内容は年代や性別に合わせて変えているが、具体的な提供の流れや患者やドナーが登場する心に響くようなメッセージ性の強い動画のURLが載せられていることが多い。それについて別紙にカラー刷りの資料を用意した。コンテンツの内容、連絡のタイミング等を図示している。Twitter、Instagram、YouTube等のSNSアカウントは、登録時のメールアドレスから特定できることも多い。いろいろなツールを通してリテンションしている。4頁目、PR・リクルート方法である。米国内においても、若者のインターネット利用率が非常に高いことから、SNSやウェブ有料広告等、オンラインでの広報活動を重要視している。とはいえ地道な活動もして大学教員へ直接メールでコンタクトを取り、了承いただける場合には授業内でNMD Pの講義、どうやったら命を救えるか等を行っている。医療系に限らず、生物学や経営学など、様々な専攻の学生に対し、教育的観点からアプローチを行っている。米国で人気のあるスポーツ、フットボール・野球等の選手を大学へ連れていくことで、多数の登録者を獲得している。アメフトの人気選手が登場し、1日で約1000名の登録を記録したこともある。リクルートについてボランティアだけでなく提携している別組織も存在し、登録人数や人種等の実績に応じてフィーを支払っている。最後にボランティアについてである。大学のクラブ活動の代表者と面会し、ボランティア活動への協力を呼び掛けている。学生だけではなく、教員や大学の事務職員など、様々な関係者に面会し、組織全体とつながりをもつことで、連携を深めている。システム的な話になるがLive

Drive では、イベントごと、リクルーターごとに ID が発行されるため、活動実績は自動的に照会できる仕組みになっている。どのリクルーターからどのドナーが登録したかまで追跡できるため、リクルーターの質を評価することも可能である。例えばリクルーター A が対応すると提供にいたるドナー応諾率が高い低い等がわかる。

続けて広報渉外部原田が報告した。

ヒアリング内容は以上で所感である。NMD P の機能、資金がある、マンパワーがある、国民性は理解しているが、やはりスワブ検査の登録によってできることがたくさんある。アメフトの選手を連れて行って 1000 人の登録があったという話もあったが、そういうところにも可能性を感じた。またオンライン上で個人情報を入力することによりたくさんの情報をいただける。紙からデータを入力し直す手間が省け人件費の削減にもつながると感じた。今回、総会に参加してドナーもスタッフもボランティアもみなさんとても楽しい雰囲気であるのが感じられた。骨髄バンクに登録して提供するということが誰でもヒーローになる可能性があって、サポートするスタッフもヒーローであるというとても明るいメッセージである。私どももリスクであるとかに目が行きがちであるが、そういったところは若年層を取り込んでいく中で重要なことだと感じた。

#### (主な意見)

- ＜小寺＞ スワブ検査を導入して約 2 年たっている訳だが、採血の検査のころと比べて費用はどうなったかわかるか。
- ＜廣瀬＞ 先方の担当者に事前に質問リストを送っていてコストも内容に入っているが、まだ回答を得られていない。ただ具体的な数字ではないがコストの削減ができているとは話していた。
- ＜小寺＞ 1 頁の下、ドナーが健康理由等により提供不可となった場合とあるが、提供不可になる割合はどれくらいなのだろうか。健康か不適格かの判定基準がだいぶ違うような気がする。それをぜひ精査して欲しい。
- ＜加藤＞ 初めて参加されて新鮮な印象のうちにいろいろなことを実践に移していくということをぜひやっていただきたい。例えば SNS を利用してのドナーへの働きかけであるが、すぐにでもできることがいくつもあると思う。見て驚いたのは一年間で毎月これでもかという感じで、しかも段階的に意識を高めていくプログラムにできている。ここまで可能かはともかく、これは我々も取り入れていくことになると思う。理事長からスワブ検査の話があつて問い合わせしているということで、問い合わせの中に入っているかもしれないが、スワブ検査でタイピングを取れなかったパーセント、それからタイピングしたのだが後の本タイピングとの違いがあつたかなかつたか。たぶんあると思うのでその数字。これから日本も取り上げていく方式だと思いが、その不安と、その他のタイピング、医療として十分かなどテクニカルなことの解決もある。時間が過ぎてしまったが、そろそろ実際に HLA 委員会などで検討した上で入っていくべきだと感じる。

### (3) 大量の資料請求者の対応

大久保広報渉外部長が資料に基づき説明した。

個人で大量の資料請求をされた方がいて、その対応について報告する。この方は、活動を個人で行なっており8月末から大量の資料請求がホームページの資料請求フォーマットを通じて送られて来た。パンフレット「チャンス」この製作費は1部20円くらいかかる。「ギフトオブライフ」各1860部、他にACポスターなどの請求である。この方は、クレジットカードによる募金を毎月1000円していただいていた。そういった背景もあって、当初はこちらも対応していたが、8月末から9月上旬に事前に先方の了解を得ずに近隣郵便局に資料を発送していた。9月24日には100円ショップ「キャンドゥ」のレジ袋に骨髓バンクのチラシを同梱する依頼を行なって欲しいと連絡があった。それは費用対効果が見込めない為、お断り文を送付した。その後、郵便局へポスターの有料広告設置に関するお願いの提案があった。問題点であるが、送付依頼のあった郵便局に広報渉外部の職員が電話で確認を行うと、事前の了解なしに送っている局があった。その後、本人に電話で勝手に動くことは止めて欲しいと申し上げたが、納得されず自ら資材を複製してでも普及啓発を行うと強硬に主張していた。その後、「ご理解ご了解賜りました企業・法人」ということで、50社のリストが郵送されてきた。複数の企業から「資材設置の依頼文が届いたが、骨髓バンクから依頼したものか」との問い合わせがあり、また「支店レベルでは判断できず、困っている」との連絡があった。これまで当法人から企業への発送数は9件、●●氏の依頼件数は44件で、なぜ依頼した内容が対応されないのか、要回答の手紙が到着した。対応について、個人で勝手に動くことは骨髓バンク事業の信用にも関わる旨、文書を作成し11月上旬に送付した。その後、本人からは連絡はない。裏の頁は私の名前を出した手紙である。最後の方に、「今後、当バンクの普及啓発について、個人で活動されることはお控え下さるようお願いいたします。また●●様の資材請求に応じることは致しかねます。当法人の理事である弁護士にも相談し、このような結論に至りましたので、あしからずご了承ください。」と事前に鈴木理事に相談の上、この文書を作成し送付した。資料請求もこういった1円切手を封筒にすごい勢いで貼ってこられているのでちょっと普通の方ではない。

#### (主な意見)

<鈴木> 協力をしたいという気持ちはあると思うのだが、有料広告を勝手に大量に送ってしまうというのは、バンクが負担することになる。逆に本来有料のものを無料でやってくれと話をしないで、いきなり資料を送られてくると「押しつけか」なんてことになりかねない。かえって広報活動のマイナスにもなり得るということもあったので、今後は謹んで欲しいというのが分かるようにした。本人から送られた書面に「結果後先を考えず、御法人にご迷惑をおかけする結果に至ること、深くお詫び申し上げます。」とあり本人も分かっている。やる前に相談して欲しかったなと思うが、本人もこういうことをしたらまずいということがわかっているので、依頼がやっぱり駄目だったかということで理解を頂けたら良かったと思う。

<橋本> 感想である。骨髓バンクが社会の中で地位を占めたという一つの証でもあると思う。昔からボランティアが、これに近い形で過剰にバンクに迫ってくるということがあったと思う。ある駅前で見たのだが、骨髓バンクに寄付をと、どう見ても骨髓バンクに寄付をじゃないグループが幟を立てて集めているのを見た。何者か聞いてみようと思ったが寄付を入れる人もいる。そこで絡んでも仕方がない。3

回くらいそこでやっていてそれ以降いなくなった。それは骨髓バンクだけではなく赤十字もある。そのようにボランティアの名のもとに社会活動を何かやりたがる人は常にいるというのは肝に銘じておいた方がいい。

<加藤> この件から一方で我々の努力も足りないなといくつも感じる。これまで当法人から企業への発送数は9件、中身を分らずに数だけで言うのは申し訳ないが、もっと我々も企業に働きかけることができるのではないかと。中身は分からないがこの方は個人で44件である。それから郵便局のポスター、これから将来スワブをやるときには郵便局からできますよといういいヒントになると思う。バンクはこれまでボランティアの人たちのいろいろな力でここまで来ているわけであるから、こういうことを含めて、そこからプロとして私たちの取り組むことを見直すきっかけになればいいと感じた。

<大久保> この方が請求されたうち9件という意味で、他にもたくさんの企業に働きかけている。

<加藤> 分かるように書いていただければ、私もまさか9件ということはないだろうと思った。ちなみに何件か。

<大久保> 正確にカウントしていないが何千とあると思う。

#### (4) 調整医師の新規申請

吉川トナコーディネート部TLが資料に基づき説明した。

平成30年11月3日から12月3日の期間に新たに申請・承認された調整医師の人数は3名、合計で1115名になった。

(主な意見)

<小寺> 超ベテランも含めて大変心強いメンバーである。

#### (5) 募金報告

大久保広報渉外部長が資料に基づき説明した。

11月の結果を報告する。件数で466件、金額で1138万6943円、前年より件数では23件、金額では約560万円プラスであった。累計で見ると昨年度と比較して2334万円プラスである。特に大きな500万円の寄付や一般の患者から100万円の寄付をいただいた。12月には、小寺理事長に寄付受けに行っていたいただいたジャイアンツからの寄付が200万円、浅野理事に行っていたいたぐるナビからの寄付が510万円、12月3日には中溝評議員のチャリティーゴルフに小野監事も参加していただいたが、そちらからも寄付をいただいた。

(主な意見)

<小寺> 大変ありがたい数字で心から感謝している。

#### (6) 移植件数報告

五月女総務部長が資料に基づき説明した。



初回であるので少し詳しく説明する。移植件数の推移ということで上段に表がある。前年の2017年度と今年度2018年度の月別の移植件数を記載している。2017年度は合計で1241件であった。網掛けの部分が2018年度で4月から11月までの件数、合計で838件である。本年度に関しては下に内訳がある。日本骨髄バンクに登録しているドナーから国内の患者への移植、海外バンクに登録しているドナーから国内の患者への移植、それから日本骨髄バンクに登録しているドナーから海外の患者へ提供される3つのパターンがある。834件、2件、2件という数字になっている。下段のグラフは累計の数字を月ごとに示した棒グラフである。11月現在で昨年と比較すると18件ほど少ない。その右側に予算対比がある。バンクの主要な収入源として医療保険財源収益、補助金、患者負担金、寄付があるが、医療保険財源収益が一番多い。これは診療報酬を基にして移植施設と契約した上で1件移植が成立するたびに55万円の収入になる。患者負担金についても移植が発生するときの手数料部分が大きい割合を占めている。予算の対比で国内から国内は年間で1230件に対して進捗率68%である。現在12カ月の内8カ月過ぎている67%になるので、ほぼ予算どおりの進捗状況ではある。ただし例年の移植状況を見ると12月と1月は長い休みが入っていることもあって件数が少なくなるので年度で1230件を達成できるかどうかは少し厳しい。国内から海外、海外から国内への提供では金額が大きいので、それなりの額にはなるが件数は減っている。予算の段階から5件ずつという少ない数字を設定している。

#### (主な意見)

<小寺> 今回初めてであるが、あと4か月推移を見たい。

<加藤> 下のグラフは実際に医療機関からバンクに入金された金額か。

<五月女> 入金ベースではなくて移植件数である。

<加藤> 例えば2017年8月107件、2018年8月126件で下のグラフの金額が同じだがどうということか。

<五月女> これは金額ではなくて、件数の累計である。

<小寺> どちらかというのと折れ線グラフで表す数字である。

<加藤> 頭の中で引き算はできないので単月で示していただいた方がよい。金額ベースでのグラフも可能であればあるとよい。

<五月女> 基本的に移植件数掛ける55万円というのが金額になるので件数と比例していると考えてよい。細かな話をすると収入計上と移植のタイミングは微妙に異なる。

<加藤> 2017年と2018年の違いは保険点数の違いである。予算を議論するときこれだけ増収になったと金額で見えていかないと半分しか見ていないのでないか。

<五月女> 金額でも載せたいと思う。ただ会計処理のスピードの問題で発生する金額はこれのほぼ2か月遅れになる。

<加藤> 入金ベースではなくて請求ベースで良いと思う。

<五月女> 請求の金額が確定するのがほぼ2か月遅れになる。単純におおよその数字を出すのであればこの数字にそれぞれ45万円と55万円を掛ければよい。

<小寺> 棒グラフは普通単月のグラフで、上の数字を棒グラフにして累積を折れ線グラフにしてほしい。

<五月女> 了解した。

- <小寺> 予断は許さないのだが、理事会で増やせと言って増えるものでもない。なぜ増えてなぜ減ったのかというのを間接的に採取施設や移植病院にフィードバックできるような情報があるかもしれない。これから情報共有という意味で今後これを毎月出してもらおう。
- <鈴木> 保険点数が上がって実施されたのはいつからか。
- <五月女> 今年度の4月分からである。
- <鈴木> 2017年度は上がる前のことで2018年4月からが掛ける55万円か。前年度はいくらだったのか。
- <五月女> 45万円である。
- <鈴木> だからこの累計の数11月で言うと838件、1件の差額が10万円であるから8380万円、件数は去年の方が多けれども、金額では上回っている。そういうことで理解をすればいいのかと思う。件数の他に金額ベースで表すことをして、件数が下回っているが金額は去年よりも多いことが財政上の観点で重要である。
- <加藤> 件数が同じ場合は良いが、移植件数が減っているので増収分がそのまま100%は反映されない。
- <鈴木> 856件と838件はグラフが示すほどの差ではないということである。
- <小寺> 理事会としてはそちらの方が本当は重要である。今後この資料を充実させたい。

## (7) その他

小島広報渉外部チームリーダーが資料に基づき説明した。

本年5月12日に国立がん研究センターで開催した共催市民公開講座は大変有意義なイベントとなった。来年度開催予定の第2回共催市民公開講座 in 広島（案）について下記の通り報告する。日程は2019年4月27日土曜日、時間についてはこれから詳細を決める。会場は広島大学医学部広仁会館、座長は広島大学病院血液内科の一戸先生である。NPO法人血液情報広場・つばさと公益財団法人日本骨髄バンクとの共催になる。参考に今年の5月12日に国立がん研究センターで開催した市民公開講座のチラシを裏面に載せている。

小寺理事長が口頭で報告した。

誤送付の件で、理事評議員の皆様方には既に資料をお送りしている。幸い記者発表の後に事務局にいろいろな質問が来ることはなかった。この件は一見落ち着いたと考えている。引き続き検討委員会による本件の根本的な改善の検討は続く。

以 上